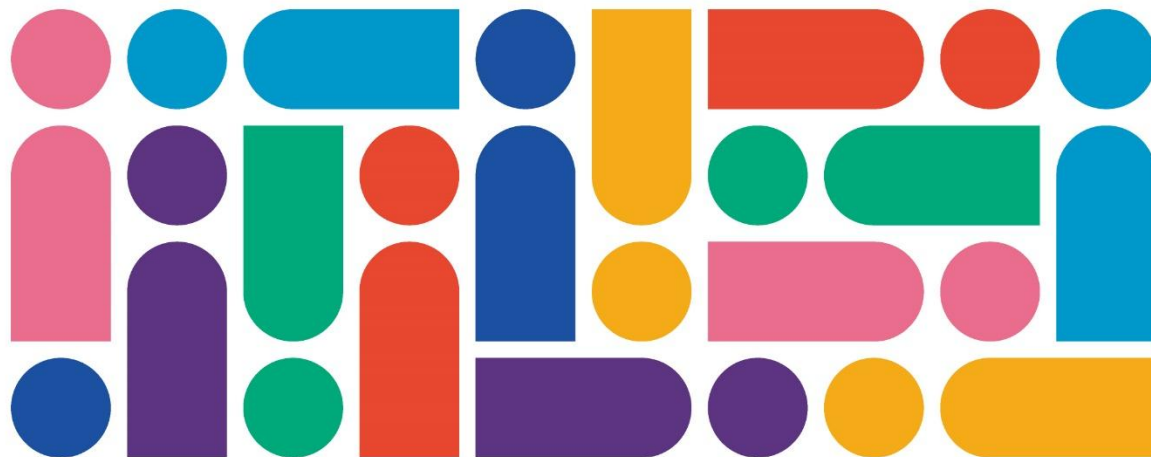


# Well-being シンポジウム

～未来を創る“豊かさ”と安心のかたち～

2026年5月15日[金] 13:30~17:00  
WITH HARAJUKU HALL

主催：一般社団法人 生命保険協会



## 開催結果報告 2026年5月

一般社団法人  
生命保険協会

# I. 開催概要

## <開催概要>

**開催目的：**国内外で重要性が高まるWell-beingへの理解の深化

Well-beingに関連して生命保険業界がこれまで担ってきた役割や取組み、今後の貢献について発信

**開催日時：**2026年5月15日（金）13:30～17:00

**開催場所：**WITH HARAJUKU HALL

<b>オープニング</b>	
開会挨拶	・佐々木 豊成（生命保険協会副会長）
来賓メッセージ	・伊藤 豊 氏（金融庁長官）
<b>基調講演</b>	
「Well-being」とは何か？ 未来を見据えたWell-beingの理解と挑戦	・前野 隆司 氏（武蔵野大学ウェルビーイング学部長・教授）
<b>Crossing Well-being Views -クロストーク①-</b>	
よりよい生き方ってどういうこと？ 正解のない時代に、“幸せ”をどう選び取るか？	・宮田 裕章 氏（慶應義塾大学医学部教授） ・トラウデン直美 氏（モデル・タレント）
<b>Crossing Well-being Views -クロストーク②-</b>	
生命保険とFinancial Well-beingの実践 “お金の安心”をどう再定義するか？	〈Panelist〉 ・石川 善樹 氏（予防医学研究者・公益財団法人Well-being for Planet Earth 代表理事） ・井戸 照喜 氏（三井住友信託銀行専門理事） ・鹿島 紳一郎 氏（日本生命常務執行役員） ・重本 和之 氏（第一生命常務執行役員）
<b>Crossing Well-being Views -クロストーク③-</b>	
企業におけるWell-beingの実践 個人の幸せと企業価値の両立をどう実現するか？	〈Facilitator〉 ・石川 善樹 氏 〈Speaker〉 ・小島 玲子 氏（丸井グループ 常務執行役員 CWO） ・羽田 幸広 氏（LIFULL 執行役員 CPO、人事本部長） ・佐藤 光信 氏（明治安田生命執行役員常務）
<b>ラップアップ／エンディング</b>	
Well-beingが溢れる未来の実現に向けて	・高田 幸徳（生命保険協会会長）
閉会挨拶	

## II. 各コンテンツ ハイライト

### 1. 開会挨拶



佐々木 豊成  
生命保険協会副会長

- Well-beingは、単に心身が健康であることや経済的に満たされていることだけでなく、自分らしく生きること、人とのつながりの中で安心して暮らせること、将来に希望を持てること、そして社会全体が持続可能であることまで含む、より広がりのある概念として改めて注目されている。
- 価値観の多様化や将来の不確実性が高まる大きな転換点において、「豊かさ」や「安心」の答えは一つではなく、正解を前提にせず多様な考え方に触れながら、それぞれのよりよい生き方や社会のあり方を考えていくことが重要である。
- 本シンポジウムは、関係省庁・団体・各業界・一般の皆さまが一堂に会し、特にFinancial Well-beingの観点から“お金の安心”や生命保険の価値について議論し、従来の保障機能に加え、健康増進・資産形成・金融リテラシー向上・働く人々の支援・地域や将来世代への貢献など、生命保険業界の新たな可能性と社会的役割について対話を深め、連携と共感の輪を広げることで、持続可能で豊かな社会の実現に向けた確かな一歩としたいという想いから開催している。

### 2. 来賓メッセージ



伊藤 豊氏  
金融庁長官

- 日本は世界でも類を見ないスピードで高齢化が進み、平均寿命は世界トップクラスである一方、健康寿命との差は約10年ある。この10年を、不安を抱えながら過ごすのか、それとも安心して充実した時間として過ごすのが大きな課題である。高齢になることを悲観するのではなく、健康寿命を延ばし、充実した人生を送ることが重要であり、Well-beingは、個人としても、社会全体としても追及すべき大切な価値である。
- こうした課題の解決には、単なる「保障」だけではなく、「予防」や「支援」に目を向けることが必要であり、ここに生命保険業界の新たな役割がある。例えば、長寿化に伴う資産形成や健康増進の支援など、Well-beingに直結するサービスを提供しうる仕組みを備えており、健康増進型保険や予防医療を支援するサービスなど、業界のイノベーションは国民生活に新たな価値をもたらし、国民全体のWell-beingに大きく貢献する。
- また、高齢化に伴う認知症や介護といったリスクへの対応や、金融教育・リテラシー向上もWell-beingの重要な要素である。行政・業界・教育機関が一体となり、人々が自らのライフプランを主体的に考え、適切な金融サービスを選択できる環境を整えることが求められる。本日のシンポジウムが、個人と社会全体のWell-being実現に向けた新たな発想と連携の契機となることを期待している。

## II. 各コンテンツ ハイライト

### 3. 基調講演（「Well-being」とは何か？～未来を見据えたWell-beingの理解と挑戦～）



前野 隆司 氏  
武蔵野大学  
ウェルビーイング学部長・教授

- Well-beingは、健康・幸せ・福祉などを含む、「体・心・社会のよい状態」を意味する概念である。ラテン語やイタリア語にさかのぼる長い歴史を持つこの言葉は、1946年にWHOが「健康とは、身体的・精神的・社会的に良好な状態（Well-being）であって、単に病気または病弱が存在しないことではない」と定義する中で用いたことを契機に、「体・心・社会を包括する広い健康観」として位置づけられてきた。その後、日本ではWell-beingが、医療分野では「健康」、心理学分野では「幸せ」、福祉分野では「福祉」と訳されてきたが、いずれも本来は「体・心・社会のよい状態」という枠組みの一つの側面にすぎない。
- 近年、世界では「Beyond GDP」、すなわち経済成長やGDPだけでは捉えきれない新しい豊かさに目を向ける潮流が強まっており、政治・行政にもWell-beingの概念が取り入れられている。たとえばデジタル庁では、どの政策がどのように人々の健康や幸福に寄与したかを可視化し、これにより重視すべき政策を議論しようとしている。
- 20世紀には、経済成長と幸福度が概ね比例していたため、GDPを測れば足りた。しかし現在は、GDPが伸びても幸福度が下がる国、日本のようにGDPが横ばいでも幸福度は上がる国が現れている。このため、GDPに加えてGDW（Gross Domestic Well-being）のような指標を用い、「Beyond GDP」の枠組みで社会をデザインしていく必要がある。同様に、SDGsも本来は地球全体の持続可能性をめざす包括的な理念でありながら、次第に個別目標のチェックリスト化が進みつつある。そこから「Beyond SDGs」、すべての人と地球のWell-beingという原点に立ち返る議論も始まっている。
- 幸福学の研究は、Well-beingが社会を良くする鍵であることも示している。幸せな人ほど視野が広く利他的で、不幸せな人ほど利己的になりやすい。お金や地位といった一時的な幸せよりも、安心感やつながりのような持続的な幸せが重要であり、その背景には「やってみよう（主体性）」「ありがとう（つながり・感謝）」「なんとかなる（楽観）」「ありのままに（自己受容）」という四つの因子がある。他者との比較ではなく、自分らしく生きながらこの四因子を育むことが、個人と社会のWell-being向上につながる。

## II. 各コンテンツ ハイライト

### 4. Crossing Well-being Views -クロストーク①-

(よりよい生き方ってどういうこと？～正解のない時代に、“幸せ”をどう選び取るか？～)



宮田 裕章 氏  
慶應義塾大学医学部教授

- Well-beingは、体・心だけでなく、社会的なつながりが良好な状態であり、その意味合いは一人ひとりによって異なる。一方で、社会全体がより良くなっているかどうかを考える必要があり、そのために共通の尺度も作られてきたが、「何をもってWell-beingか」は突き詰めていくと変わりうる。社会とのつながりを含むことで不変ではなくなり、「常に揺れざるを得ない状態」として理解している。
- 好きなものを深く考えることで、さまざまなつながりが生まれ、社会との関係が立ち上がる。自身の「ペンギン推し活」については、突き詰めていくと、自然保護・環境問題や持続可能性といった大きなテーマに接続する。特に好きな皇帝ペンギンは南極の環境破壊によるリスクにさらされており、ペンギンがWell-beingであるためには環境を大切にしなければならない。
- SDGsは、ミニマムな目標を掲げたことは良かったが、その達成のためにも、一人ひとりの生きがい・働きがいを支えることが重要。かつて企業には経済合理性の最大化が強く求められたが、現在は企業のミッションそのものが社会全体のWell-beingにどうつながるかが問われるようになっている。

- 自身のWell-beingは、「人生が思いどおりにならないことを理解したうえで、それでも自分を好きでいつづけられるようにすること」と定義している。生きていくうえでは、人間関係で傷つくリスクや、仕事の不安など、さまざまなリスクや「ままならなさ」が存在する。その中で「どうすれば今の自分を好きでいられるか」「自分の安心材料は何か」を考えることが、Well-beingにつながる一つのヒントである。
- 思考のクセとして、「ベキベキ思考・ネバナ思考」が強く、相手にも自分にも期待しすぎて、小さな出来事でもモヤモヤ・イライラしてしまっていた。そこから、「相手に期待しすぎない」「自分にも期待しすぎない」ことを大事にし、「今日は無理だ」と感じるときは素直に人に頼ること、調子が良いときは頼られたら気持ちよく受け止めること、といった関係を理想像として描いている。
- 心の安定には、少しの余裕や「余白」が欠かせない。思いがけないことが起きたときにも受け止められるキャパシティをあらかじめ取っておかないと、何か起こった瞬間にパニックになってしまうことがある。その意味で「保険」というものは、その前にかっこ書きで「心の」が付くイメージを持っており、心の余裕や余白が人生の選択肢を広げ、より明るい方向へ進む可能性を増やしてくれるものと感じている。



トラウデン直美 氏  
モデル・タレント

## II. 各コンテンツ ハイライト

### 5. Crossing Well-being Views -クロストーク②-

#### (生命保険とFinancial Well-beingの実践 ～“お金の安心”をどう再定義するか?～)



石川 善樹 氏  
予防医学研究者

Well-being for Planet Earth 代表

- お金の不安には大きく「認知」「時間」「関係性」の側面がある。お金の不安があると認知機能が下がり、非合理的な行動をとりやすくなる。さらに、10年後・20年後といった長期の時間軸で考えにくくなり、目先のことに意識が縛られる。人間関係においても、人に相談しにくくなったり、孤独・孤立を招きやすく、幸福への悪影響が大きいとされる。
- がん検診を「受けない理由」の第1位は「なんとなく受けていない」である。行動のドライバーには「意識を高める」「手続きの障害を下げる」「きっかけの提供」があるが、「いつか受けよう」の「いつか」が今にならないという「きっかけ不足」が課題となっている。生命保険会社は、お客様と深く接する中で、この「きっかけの提供」というラストワンマイルを担いうる存在であり、健康やWell-beingに向かううえで、生命保険業界ならではの貢献の形が見えてくる。
- 「どれだけ長い時間軸で捉えられるか」が今後重要になってくる。現状では、目先のお金を増やすか、守るかに意識が集中しがちだが、長期の「Financial Well-being (FWB)」に向き合うことが、「結果としてどう生きたいのか」という人生設計そのものと結びついていく。生命保険業界が非保険分野や各種保険領域へとカバー範囲を広げる中で、具体的な取り組みは、こうした長期視点のFWBを支える明るい兆しとなる。

- FWBは、現在と将来の両方の視点から、「経済的な備え」と「選択肢の拡大」を通じて、多様な幸せと安心感を得られている状態と捉えられる。重要なのは、「自分が思い描く人生を実現できそうか」という将来の見通しまで含めて考えることである。
- FWBは、現在の収入や資産の多寡だけで決まるものではない。「病気・失業・老後」などへの経済的な備えを通じて「マイナスをゼロ」にしつつ、学び・転職・セカンドキャリア・地域活動などを選べる状態をつくることで「ゼロをプラス」にしていく、この二つの金融行動がそろってはじめて、FWBは本当に高まる。ここを支えるために、NISAや保険料控除などの制度と、それを使いやすくする企業・金融機関のサポートが欠かせない。
- 長期のキャッシュフローに合わせた運用という意味では、個人版「年金ALM」の実践ともいえる「貯蓄性・年金性の保険商品」や「機関投資家としての長期・非流動性資産への投資」は、「マイナスをゼロから、プラスへ」と押し上げる役割を担える。生命保険ならではの膨大なデータと運用ノウハウを生かし、パーソナライズされた資産形成支援と金融経済教育を提供することにより、一人ひとりのFWB向上に大きく貢献しうる。



井戸 照喜 氏  
三井住友信託銀行  
専門理事

## II. 各コンテンツ ハイライト

### 5. Crossing Well-being Views -クロストーク②-

#### (生命保険とFinancial Well-beingの実践 ～“お金の安心”をどう再定義するか?～)



鹿島 紳一郎 氏  
日本生命  
常務執行役員

- 生命保険は、FWBに対して「経済的リスクのカバー」と「心理的安心の提供」の両面から貢献する。多数でリスクを分かち合い、医療費や長期療養、所得喪失などのショックに備えることで家計のキャッシュフローを守ると同時に、営業職員等がお客さまの家計やライフプランを丁寧に伺い、必要保障の見える化と数値に基づく提案を行うことで、漠然とした不安を「何をすればよいか」に変え、行動につなげていく。
- 「一生涯、寄り添う」存在として、契約後も定期的なコンタクトや契約内容確認を行い、生活の変化を踏まえた見直し提案やアドバイスを通じて、「把握→相談→行動」のサイクルを現場で回している。また、地域での健康・がん・交通安全啓発などを通じた行動変容も重要と考えている。例えば当社では、「人」「地域社会」「地球環境」という3つを軸とするサステナビリティの高度化を進めているが、こうした地域に密着した取り組みを通じて、営業職員の社会的な価値と信頼を更に高めていきたい。
- さらに、当社では、生命保険に加え、資産運用やヘルスケア、介護、子育てなど多面的な安心を提供する“安心の多面体”としての企業像を掲げている。人生のさまざまな局面で必要となる支えを一体的に提供し、お客さまのWell-being向上と社会課題の解決の双方への貢献を目指している。

- 生命保険商品はFWBにとって、大きく「保障」と「資産形成」の二つの要素で重要な役割を果たしている。予期せぬ病気やケガによる治療費、収入減少などのリスクを緩和し家計のキャッシュフローを守ることに加え、貯蓄性商品による長期的な積立を通じて、将来の収支を見通しやすくすることで、ありがたい人生の実現を支える。
- 保険会社は、将来の給付を確実にするとともに、適切な収益を上げるために運用を行っており、保険商品を通じて、お客様のFWBに貢献しており、この考え方は政府が掲げる資産運用立国の趣旨とも合致している。加えて、私たち生命保険会社は、保険商品による「保障」と「資産形成」の手段を提供するだけでなく、機関投資家として成長資金を供給することで、日本企業の成長を促し、その成果が、配当や株価の上昇という形で家計へ還元される、そうした好循環の実現を目指している。
- “お金の不安”より“生きる希望”を語り合える社会に向けては、保障と資産形成の両面を活用することが重要である。長期的な資産形成で将来の収支を見通しやすくしつつ、予期せぬリスクに備える保障という「一歩踏み出すための安心」があつてこそ、人は初めて「これから先、自分はどうしたいのか」と前向きに未来を考えることができる。



重本 和之 氏  
第一生命  
常務執行役員

## II. 各コンテンツ ハイライト

### 6. Crossing Well-being Views -クロストーク③-

#### (企業におけるWell-beingの実践 ～個人の幸せと企業価値の両立をどう実現するか？～)



石川 善樹 氏  
予防医学研究者

Well-being for Planet Earth 代表

- 企業のサステナビリティが意識される中で、企業活動が人々のWell-beingへ与える影響も問われるようになってきている。企業経営においては、地球・従業員・顧客・地域など、さまざまなステークホルダーのWell-beingを意識しなければ、サステナビリティの観点からも立ち行かないという認識が強まっている。
- 企業という文脈におけるWell-beingについて、「皆が適度なストレス状態で働いていること」という定義がある。ストレスは高すぎても低すぎても良くなく、適度なストレス状態こそがWell-beingな状態であり、それは別の言葉で言えば「フロー（没頭）」の状態である。このフロー状態に入るためには、「自ら選択し、行動する」という主体性が極めて重要。
- Well-beingな組織づくりを掲げる経営陣は、自身がWell-beingであるケースが多いという実感がある。経営者がまずWell-beingであることが何より重要であり、その上で組織の上から現場まで、一人ひとりがWell-beingに向かっていく状態を目指す必要がある。一人ひとりのWell-beingは多様で尊重されるべきだが、企業としてWell-being経営を行う上では、自社なりのWell-beingの定義を持ち、それを文化や仕組みとして組み込んでいくことが求められる。

- 企業におけるWell-beingの実践は、単に「人を幸せにする」という目的だけでなく、企業が目指す「ありたい姿（ビジョンやゴール）」から逆算し、そのビジョンを達成するための不可欠な原動力として積極的に推進していくことが重要。丸井グループは、「全ての二項対立を乗り越える社会」「ステークホルダーの重なり合う利益と幸せの拡大」が事業の目的であり、その実現のために一人ひとりがWell-beingである必要がある、と位置づけている。健康を通じた人と組織の活性化が、企業の事業やビジョンとしっかりと統合されてこそ、真に効果を発揮すると考えている。
- 丸井グループでは、フロー状態を作り出すために、一人ひとりの強みの領域で、少し背伸びした挑戦をアサインすることを重視している。能力と挑戦のバランスを指標化し、両者が釣り合っている従業員の割合を2030年までに80%にすることを目標にしている。医師としての経験も踏まえ、「病院がマイナスをゼロに戻す場だとすれば、企業はそこにいる全員を今よりプラスにする場」と捉え、働く人のWell-being向上を重視している。
- 丸井グループでは、昇進や異動などさまざまなことを「手挙げ」で行っており、近年は、社員が「好き」を起点にフロー状態で働ける企業文化の醸成にも力を入れている。企業がどのように価値創造をしていくのか、その過程でWell-beingが必要かどうかを言語化し、経営戦略と結びつけて定義することが大切。



小島 玲子 氏  
丸井グループ  
常務執行役員 CWO

## II. 各コンテンツ ハイライト

### 6. Crossing Well-being Views -クロストーク③-

#### (企業におけるWell-beingの実践 ～個人の幸せと企業価値の両立をどう実現するか?～)



羽田 幸広 氏  
LIFULL  
執行役員 CPO  
人事本部長

- LIFULLでは、Well-beingとは「挑戦し続けるための土壌」と捉えている。従業員が前向きに仕事に取り組み、熱中し、フロー状態に入っているときに新しいアイデアや事業が生まれ、企業が成長してきた。イノベーションは「起こせ」と命じて起こるものではなく、難しいことに挑戦し失敗を繰り返す中で生まれるものであり、その前提としてWell-beingな状態が重要である。
- その土壌づくりの中心にあるのが「つながり」と「挑戦を選択できること」である。挑戦については、内発的動機を重視しており、異動や業務時間の一部を使った社内副業、新規事業提案制度などに結びつけている。社員が自ら「やりたい」を選択し、オーナーシップを持って動けるようにすることで、守りから成長モードへの切り替えを促している。
- 会社の目指すビジョンと個人の挑戦が響き合うことで、最大の成果が生まれると考えている。そのため、採用段階からお互いの方向性の共鳴を大切にし、同じ未来を見据えた上での多彩な挑戦を広く歓迎している。会社が決めた枠に人を当てはめるのではなく、従業員一人ひとりの価値観や「こうありたい」という想いを尊重し、それを事業を通じた価値創造につなげることが、企業成長の核になると考えている。

- 従業員のポテンシャルを最大限に活かし、挑戦心をブーストさせることは、組織全体の創造性に直結する要素として重視されている。経営層も、健康経営やエンゲージメント向上を福利厚生ではなく経営課題と捉え始めている。かつての保険が「万が一の備え」という静的な存在だったのに対し、現在は企業のWell-beingを動的に支えるパートナーとして、従業員が安心して挑戦し続けられるインフラを提供する役割が期待されている。
- 個人の挑戦や主体性という「従業員一人ひとりのエンジン」を回し続けるには、揺るぎない安心が不可欠であり、「見守られている安心感」が、限界への挑戦を可能にする。従業員は一人ひとりが尊厳をもつ存在であり、会社は、幸せややりがいを感じながら「フロー状態」で仕事に取り組める環境づくりに努める必要がある。
- 変化の大きい環境下では、多様な人材が安心して変化に適応し挑戦できる組織基盤が重要。経営戦略と人事戦略を連動させ、多様な人材ポートフォリオとレジリエンスの高い人材集団を整えるだけでなく、社会全体のWell-beingを支えるサービスや仕組みを戦略的に活用し、「業界の垣根を超えた連携」によって知見やセーフティネットを共有することが求められる。こうした共創による支え合いが、個人のWell-beingを支える社会基盤となり、企業の持続的な競争力にもつながっていく。



佐藤 光信 氏  
明治安田生命  
執行役員常務

## II. 各コンテンツ ハイライト

### 7. ラップアップ／閉会挨拶



高田 幸徳  
生命保険協会会長

- 本日のシンポジウムでの議論を三つのキーワードで振り返る。  
第一は「ものさしを、幸せに変える」。  
GDPやSDGsといった従来の枠組みを超え、その先の未来や地球環境を見据える新たな「ものさし」としてWell-beingを捉え直すとともに、幸せの四つの因子を鍵として、個人、企業、地域社会、そして地球全体を再整理していく重要性を確信した。  
第二は「保険を、『挑戦を支える存在』へ」。  
生命保険は「雨の日の傘」である以上に、資産形成や行動変容の仕組みを通じて、人が人生の「やりたいこと」を諦めず、何度でも立ち上がるための心理的・経済的な自由や余白を生み出す存在である。  
第三は「豊かさや幸せこそがエネルギー源」であるという確信。  
我々が目指すべき「豊かさ」や「幸せ」は、水面の波紋のように周囲へと広がっていくエネルギーである。生命保険が担う企業の福利厚生も、単なるコストではなく、従業員、顧客、社会といったすべてのステークホルダーのWell-beingに向けた「投資」として捉えるべきである。
- ラップアップ映像の中の皆様の笑顔、そして会場の皆様の眼差しを見て、私は「未来をWell-beingにする」という私たちの旅は、もう、止めることのできない大きな「うねり」となって始まっていることを確信した。
- 私は常々こう考えている。Well-beingとは、誰かに与えられるものではなく、一人ひとりが自ら選択し、行動することで育んでいくものだということである。すなわち「Well-being is a choice」。  
置かれた環境は一樣ではないが、「今日をより良く生きよう、誰かを幸せにしよう」と心に決めて踏み出す小さな一歩こそが、社会や未来を根底から変えていく最強の原動力である。
- しかし、この大きな挑戦は、私たち生命保険業界だけで成し遂げられるものではない。これからのWell-beingの実現には、業界の垣根を越え、互いに手を携えて新しい価値を共に作り上げる「共創」が必要不可欠である。  
本日の展示に象徴されるような多様なつながりを原動力に、共に新しい未来を、私たちの手で切り拓いていきたい。

# Ⅲ. 展示エリア

## <Well-being Gateway>



## <Well-being Shelf>



## <Well-beingな生き方を考える展①>



## <Well-beingな生き方を考える展②>

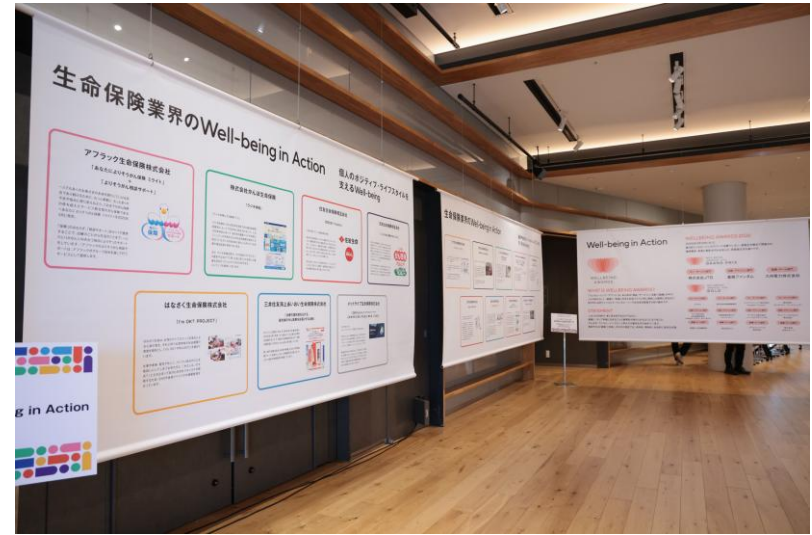


# Ⅲ. 展示エリア

## <Well-being Live>



## <Well-being in Action①>



## <Well-being in Action②>



## <Well-being in Action③>

